

特集：卒業

変化の時代に巣立つ皆さんへ

佐藤 忍（筑波大学 生命環境科学研究科、生物学類長）

皆さん卒業おめでとうございます。88人の卒業生に学位記を手渡す事ができて大変嬉しく思います。ここにいる皆さんは、ほとんどが2004年度入学です。実は2004年は、筑波大学にとって大きな節目となる年でした。国立大学法人への移行です。今までの国の一機関から独立し、私立大学と同様な独立した機関となりました。そこでは、大学としての目標や財務状況など、説明責任が問われるようになりました。国立大学も切磋琢磨の時代を迎えたのです。また、昨年（2007年）には、学群再編によって、30年以上続いた第2学群が生命環境学群へと変わりました。合わせて生物学類では、これまでの基礎と応用からなる主専攻を統合して生物学主専攻とし、多様性、情報、分子細胞、応用生物、人間生物の5コースに再編しました。これは外部から教育内容が分かりやすくなることを目的としています。このように、大学間の競争を意識しつつ透明性の高い大学運営が求められるようになったのが、皆さんが在学したこの4年間でした。

一方、生物学の世界に目を向けてみると、皆さんが高校3年生であった2003年にはヒトゲノムの全塩基配列の解読があり、それまで様々な生き物のゲノム情報解読が進んだこととあわせて、生物学はポストゲノム時代へと突入しました。その1つの頂点として、昨年、京都大学でiPS細胞が開発されたことは記憶に新しいところです。皆さんが本学に在学したこの21世紀の初めは、生物学の方法論の大転換の年として後世に残ることでしょう。また、生物多様性の分野でも、2004年にはカルタヘナ法と外来生物法が我が国で施行され、遺伝子組換え生物と外来生物の取り扱いが法制化されました。また、昨年には、IPCCと米国のゴアさんが地球温暖化防止の啓蒙活動に対してノーベル平和賞を授与されたことも大きなニュースでした。米国ではバイオエタノール利用の推進がうたわれ、その影響でかえって世界に食料や生物多様性の問題が生じていることがクローズアップされてきています。

皆さんは、このような凄まじい変化の時代に大学生生活を送ってきました。これからも含めていつの世もそうなのでしょうが、このような変化の中で私達はどう生きていったら良いのでしょうか。私は、限られた自分の経験からではありませんが、チャレンジ精神旺盛に、世の中の進歩、未知なる物、新しい情報を常に積極的に取り入れていくことが重要であると思います。どのような分野でも活躍している人は、高齢でありながらも新しい事を食欲に吸収しようとしていて、その姿に感心させられます。自分にリミットを置いてしまったらそこで終わりなのです。一方、今の事と矛盾するようですが、世の中の進歩を追いかけてばかりいては自分を失ってしまいます。自分ならではのコアをしっかりと芯に据え、自分の特徴や大切にしている物を堅持することによって、その人の個性が生きてくるのです。この両者のバランスを如何にとるかが皆さんに問われています。そのためには、日々、自分を磨く努力をすることはもちろんですが、自分に対する自信と誇りを持つことが重要だと思います。皆さんは大変優れているし、人に誇れる点をたくさん持っています。この筑波大学生物学類を卒業した自分を大切に、誇りを持ってこれからの人生を歩んでいってください。

最後になりますが、皆さんがここ筑波の地に集って過ごした4年間は二度と取り戻せません。教員や学友、サークルでの友人、さらには学問や様々な経験との出会いを今後の肥やしにしていってください。大学時代の友人は一生の宝です。連絡を絶やさずネットワークを維持していってください。

皆さんは本日、大学院生や社会人として新たな道を歩きだします。それぞれの道で自分なりの高い目標を掲げ、挑戦していってください。後に残る我々教員一同は皆さんの将来に大いに期待しています。卒業おめでとう。

Contributed by Shinobu Satoh, Received March 28, 2008.